Shinshu University Institutional Repository SOAR-IR

| | |
|---|---|
| Title | <書き散らかされたもの>が描く軌跡：<個>と<社会>をつなぐ不確かな環を求めて：<調査>という営みにこだわって |
| Author(s) | 下田平, 裕身 |
| Citation | 信州大学経済学論集 54:1-85(2006) |
| Issue Date | 2006-02-28 |
| URL | http://hdl.handle.net/10091/656 |
| Rights | |

# 第2部　＜書き散らかされたもの＞が描く軌跡

—＜個＞と＜社会＞をつなぐ不確かな環を求めて
—＜調査＞という営みにこだわって

目　次

1　＜書く＞という営み
2　2つの習作
3　＜公＞と＜私＞の関係のあり方に関する関心
4　「氏原工房」における調査修行
5　原爆被爆者問題への関わり
6　少数派労働組合運動への関わり
7　労働争議のある一瞬を描きとめる
8　イギリス生活とH．ベイノンの『フォードに働く』の翻訳
9　労働組合運動への＜挽歌＞
10　＜雑居学＞のすすめ，または＜アジア＞の発見
11　80年代初めにおける労働と生活の関連構図
12　＜社会階級＞概念への関心
13　都市の拡大の律動と＜都市スラム＞
14　＜調査するもの＞と＜調査されるもの＞との関係
15　＜調査技術＞の社会的な定立をめぐって
16　70年代後半以降の実態調査の変貌
17　地域の経済的自立を目指して
18　ニカラグアとカンボジアへの関わり
19　生活福祉研究機構とその調査
20　地域レベルの＜民主主義＞のありようをめぐって
21　＜個＞と＜社会＞をつなぐ不確かな環を求めて

※自分が書いた文章について言及する場合，第1部のリストにおける通し番号で表示している。

## 1　＜書く＞という営み

いつの間にか今年2005年10月で65歳となり，定年で大学を去るという人生の区切りの時を迎えることになった。退職を前にして，自分がその時どきに書いて発表したもののリストを作成して学部紀要に載せてもらうという話を紀要委員からいただいた。私にとっては，今まで，やりたくもなく，やろうともしなかった作業である。何故なら，自分のどうしようもない過去の＜貧しさ＞に否応なく正面から向かい合わせら

止運動はこれを契機に高揚することになる。原子力開発推進者は，原子力利用に伴う放射能障害の危険性への配慮，予想される原子力事故に伴う補償措置など，日本人の＜核アレルギー＞に対する対策を考えねばならなかった。53年暮れには，「原爆障害者の治療費を国が負担するための特別立法の考えはない」としていた国は，突然に姿勢を変え，福竜丸事件の後に，原爆医療法を制定したのである。このような展開を見るとき，国は，核の＜平和利用＞がはらむ危険性の問題と広島・長崎の原爆被害の問題が結びつけられることを恐れ，２つの問題を意識的に切り離す政策展開を行ってきたのではないかと推測される。アメリカ占領下で広島と長崎におかれたABCC（原爆障害調査委員会）の活動とこれを引き継いだ日本の放射能障害研究は，被爆者対策と原発の放射能事故への対策に深く関わっていることが推測されるが，なおも深い＜闇＞に包まれている。

## 6　少数派労働組合運動への関わり

1960年代後半から70年代前半の時期は，戦後日本労働運動にとっての大きな転換期であった。いや，むしろ，70年代後半以降の労働運動がどのように推移したかを考えれば，労働組合運動そのものが＜解体＞へと向かう転換期であったというべきだろう[14]。この時期に先行する1950年代後半から60年代は，労働組合運動の拡大期であった（少なくとも，そのように見えた）。高度経済成長という労働者にとっては有利な経済環境を背景に，総評を軸にした賃上げ運動（春闘）が太田—岩井ラインと呼ばれた指導部のもとで盛り上がりを見せていた。労働市場における売り手有利の条件のもとで，労働者側の経済的要求を実現させるための労働争議も盛んに行われ，春闘の交通ストは社会的行事のようになった。大企業労働者・公務員に著しく偏っていた労働組合組織も少しずつ中小企業分野にも拡大しようとしていた。ところが，60年代後半になると，ストライキを多用する総評主導型の賃上げ運動に警戒が高まり，春闘の主導権は主要金属産業の労働組合の連合体であるIMF＝JCに移っていく。また，この時期には，経済成長をリードしていた鉄鋼，造船，重機械，化学などのいわゆる重化学工業の拡大も翳りをみせ，有力大企業の合併統合の動きがあり，労働運動の動向もこうした動きに密接に絡み合っていた。組合員勢力も総評の＜スト偏重＞を批判する同盟の組合員の数が次第に増加し始める。また，60年代末には，協調主義的な路線をとる労働組合の大同団結を目指す＜労働戦線統一運動＞が提唱され，民間労組を中心に影響力を広げつつあった。

こうした組合運動の路線変更と，労戦統一に伴う組織再編が始まる過程で，いくつかの労働組合では分裂が起き，＜少数派＞労働組合が生まれた。多くの場合，組合執行部が総評型運動からの離脱を提起し，圧倒的大多数の組合員がそれに従ったから，その方針に抵抗する少数の組合員は，分裂して自らの労働組合組織を立ち上げることを迫られたのだった。また，多数派が組合を分裂させたために，少数派の親総評系組合員が取り残されたという事例もある。1970～72年には，私が個人的に関わりあうことになる分裂少数派組合のほとんどが形成されている。70年には，ゼネラル石油，長崎造船第三組合，全造船・石川島，特殊製紙労組・岐阜，71年には，日本カーバイト，全金・本山，72年には，船舶通信士組合，全造船・浦賀，同玉島，東京都学校事務労働組合などである。これらの分裂少数派組合は，組合運動のなかで大きな流れを形成するほど，数多く生まれたわけではない。労働組合運動の＜正史＞では完全に無視されているし，労働運動の研究者も関心を払ったものはきわめて少ない。しかしながら，その運動は，戦後労働運動がいわば＜自滅＞に向かうプロセスへの抵抗として生まれたものであり，それゆえに，これらの分裂組合の誕生には，日

14　現時点ですら，ほとんどの労働問題研究者は，そのように断言する勇気を持たない。そのように表現できるためには，さらに，何世代かを経なければならないかもしれない。

本の労働組合運動のあり方に対して根源的な問いが象徴的に表現されていると私は考えている。

少数派労働組合運動に関わり始めたのは，71年半ば頃だった。この頃には，上に述べたように，少数派組合が次々と生まれていた。そればかりではなく，＜街頭から職場へ＞というスローガンのもとに，街頭で反戦活動をしていた反戦青年委員会の若い労働者たちが自分の足元の生活現場である職場で活動を始めようとしていた。中には，街頭でデモ行為をしていたことが職場にばれて解雇処分を受けた人も多くいて，職場復帰を要求して，「○○君を守る会」などの支援闘争が各所で展開されていた。この人たちも職場ではほとんど＜少数派＞であるか，まったくの孤立状態にあった。また，自分の属する組合が路線転換をするなかで，そうした方向に反発して，意見を同じくする少数のグループで，あるいは個人で活動している労働者たちも多くいた。さらに，中小規模の組合で青年労働者が執行部のリーダーシップをとり，組合ぐるみで労戦統一の方針に抵抗する活動を展開しているケースもあった。首都圏では，70年から71年にかけて，こうした活動をしている人たちが横の連携を取り始めていた。これらの人たちに共通するのは，労働組合の投票で選ばれた役員＝組織代表として活動するのではなく，それぞれ少数派組合や職場グループやその他の活動家グループに属しているにせよ，一人一人が＜自立した活動家＞として参加していたことだった。それぞれの活動現場では，会社側からにらまれる存在であるばかりでなく，大多数の無関心な同僚に囲まれた＜少数派＞であることでも共通していた。

それ以前の，さまざまな労働運動の組織は，ほとんどすべて労働組合という組織の連合体，言い換えれば，組織と組織の連携として成立していたから，労働運動という場で，＜自立した活動家＞が個人として結集するという形態は画期的なものであった。それは，自立した個人が自らの意思で自由に結集するという学生の＜全共闘組織＞や労働者の＜反戦青年委員会＞，あるいは，小田実氏たちが組織した反戦市民組織である「ベ平連」などの組織の考え方にも通ずるものがあった。私たちは，そこに＜本来の労働組合組織＞の芽生えを見ていた。日本の労働組合では，たいてい，ある会社に就職したら，＜自動的に＞その会社の労働組合員になり，自らが労働組合員であるという自覚はきわめて薄い。そうではなくて，自らの決断において組合に参加する，あるいは，志を同じくする者たちが自らの組合をつくるというのが，労働組合の普通のあり方ではあるまいか，もともと労働組合とはそのようにして始まったのではないか，と考えていたのである。労働問題の研究者で，この点に深い関心を示した数少ない存在，あるいは唯一の存在は，藤田若雄先生（当時，東大社研）であった。無教会派のクリスチャンであった藤田先生は，自らの決断に基づいて参加するものによってつくられた組織を，原始キリスト教時代の信者集団になぞらえて＜誓約者集団＞と名づけられた。私は，後に，藤田先生の著作集の編集に参加することになり，このとき展開された労働組合組織論を中心とする巻（第三巻）を担当して，解説論文「労働者はいかなる組織を持つべきか」を書いている（39）。

70年から71年にかけて，首都圏の分裂少数派組合や争議中の組合，労戦統一に反対する組合活動家，職場活動家などが連絡を取り合う組織が形を整えつつあった。70年７月には，東京都労働組合活動家会議（都労活）が結成され，71年12月には，初めて関東圏の活動家たちの交流集会が行われた。都労活を中心として，71年には，全国労働組合活動家会議（全労活）がたちあがる。こうした活動家たちの交流を広げる世話役をしていたのは，社会党系の活動家であった根岸敏文さん，＜新左翼＞のリーダー，松本礼二さん（共産同系のセクトのリーダー），樋口篤三さん（構造改革派系のセクトのリーダー），清水一さん（労働評論家[15]）たちだった。

15　当時，数は少ないが，なおも＜労働評論家＞という人が存在していた。＜労働評論＞という場が狭いながらも，かろうじて存続していた。

さらに全造船石川島分会の佐藤芳夫さんが加わる。佐藤さんは，かつて総評系全造船の役員を務めた人であるが，彼の属する石川島分会は，同盟系からの分裂攻撃を受け，一転して少数派組合となってしまった。佐藤さんは少数の仲間たちとともに組合を守り抜き，組織を存続させることに成功した。その思想は，今や労働組合は本来の姿ではなくなってしまっている，普通に労働者の利益を守る活動をする＜あたりまえの労働組合＞を再興しなければならない，というものだった。彼は，その考えを『あたりまえの労働組合へ』（1973年，亜紀書房）という本に書いて，多くの労働者にアピールした。根岸さん，佐藤さんは，社会党系の活動家であったが，この集まりには，多くの＜新左翼＞の活動家たちも関わっていた。＜新左翼＞のリーダー格の人たちは，もともと共産党に属していた人たちで，共産党の主流とは相容れず，党内抗争の結果，党を追われたり，自ら離れたりして，新たな組織（セクト）を立ち上げていた。さまざまな流れがあり，セクト同士の対立もあったようだが，労働運動の活動家たちの交流には，革マル派を除く主要な党派・グループが参加していた。それまで，政治的な党派は，社会党や共産党の影響力が強い労働組合運動の領域には，なかなか入り込めなかったが，新たな動きの中で，労働運動の場に自らの政治主張を持ち込めそうだと判断したようだった。もちろん，こうした人たちの他に，どの政治党派にも属しない若い活動家（＜ノン・セクト＞と呼ばれた）たちも沢山いた。私は，神林章夫さん（当時，信州大学）とともに，大学に拠点をおく労働問題研究者としてではなく，なんとなく活動家仲間の一人のような感じで，交流の手伝いをしたりしていた。神林章夫さんは，私より数年先輩で，東大の助手時代に＜助手共闘＞を通じて知り合ったが，左翼政治運動と労働運動について，独特な，鋭い感性と分析力を持っていた人である。この人も＜大学の研究者＞であることをとっくの昔にかなぐり捨てていた[16]。ただし，現場で活動しているメンバーは，私たちのことを，＜うさんくさい，へんなヤツら＞と見なしていたようだし，実際，運動そのものからは，たえず一定の＜距離＞をおいているような存在だったから，＜うさんくさいヤツら＞であることには間違いなかった。72年7月に行われた第1回の全国労働組合活動家交流集会（全労交）には，400人を越える活動家が集まった。翌年の第2回には，1000人近くが集まる。そうした交流の熱気の中で，労働組合運動は大きく変わっていくかもしれないという期待と興奮があり，いろいろなタイプの現場活動家と知り合い，ネットワークが広がっていくことが楽しみだった。ただ，＜新左翼＞のセクトの人たちには，違和感があった。労働運動を政治的な反乱に結びつけたいという発想を露骨に表明する人たちが多かったし，何よりも，第一の関心事はそれぞれの政治セクトの影響力の拡大にあるように思われたからだった。また，若いメンバーはともかく，幹部の人たちは古い共産党の党内政治の手法が身に染みついているような感じで，独特な政治的臭いを漂わせていた。だから，私がもっぱら付き合ったのは，セクト色の薄い，現場に拠点をおく若い活動家たちだった。とくに，全金・本山（仙台市）と日本カーバイト労組（魚津市）の二つの分裂少数派組合の組合員の人たちとの付き合いが深くなった。

この時期の労働運動についての私の認識は，いくつかの文章に残されている。中心的なものは，「労働戦線の現局面と左翼少数派運動の展望」（22）というタイトルで，神林章夫さんが主導し，私との共同によって書いたものである[17]。当時，労働組合活動家の交流の事務局を運営していた根岸さん，佐藤さん，清水一さん，松本さん，樋口さんたちと，大学に籍をおいていた私たちが一緒になって，たえず情勢分析のための研究会を開いていた。そのなかで，私たち＜文章を書ける者＞たちに，現局面を分析した上で，今後の展望についてまとめてくれ，というような話があって，私たちが執筆したもの

16　神林さんは，その後，大学を辞めて，スーパーマーケットを経営する企業の社長になった。

である。この文章には，春闘をリードした総評時代が終焉し，＜労戦統一＞へと向かい始めている当時の労働運動の状況が簡潔に描きとめられていると思う。この部分は主として神林さんの執筆によるもので，トータルな政治支配という視野から，労働運動の動き，とくに総評に残る＜戦闘性＞を維持しているかに見えた公労協の性格を冷静に解析している点で，独特の鋭さがあった[18]。私が受け持ったのは，＜労戦統一＞という包囲網のなかで，それに同調せず反乱する青年労働者たちがどのような組織の形で自己を表現し，連携しあって，対抗力を発展させていけるかという議論の部分であった。私の主な主張は，＜少数派＞としておかれた状況は，主流的な勢力の包囲によって生み出された受動的なものであったとしても，むしろ，＜少数派＞であることを積極的に引き受けるべきではないか，その決断が次の新たな変化を生み出していくのではないか，というものであった。その上で，左翼少数派の労働者が結集していく組織の形態としては，＜右派組合＞や＜従来型の社共系組合＞に対抗する第三勢力としての＜少数派組合＞，企業という枠を超え，地域で結集する＜地域合同労組＞など，当時，模索されていた新たな労働者組織のあり方を議論した。私たちは，いろいろな現場で活動する＜少数派＞がお互いに連携して，主流的な流れに対抗する潮流をつくりだすという展望を論じたが，＜少数派＞がやがて多くの人の支持を獲得して＜多数派＞になり，＜大衆的反乱＞へと発展していく，というような展望は描いていなかった。この点に対しては，とくに政治セクトの人たちから，＜少数派至上主義＞というような批判を受けた。しかし，私は，好んで＜少数派＞を選択するものではないが，自立的な決断の結果として生まれた＜少数派＞であるという結果の状況は積極的に引き受けるべきではないか，という立場であった。もう一つ，この文章では，＜活動家＞（あるいは，現場リーダー）という存在を重要なポイントとして，私たちの運動論の中核にすえていた。ここでの問題意識は，＜普通＞の人びと（rank & file）が労働の領域でも，あるいは，より広い社会的領域でも，自らの考えを組織的な行動表現に移していくためには，＜活動家＞という媒体が大事な役割を果たすのではないか，という点にあった。全員加入型の企業別組合，学生自治会，地域の町内会のように，無自覚的に形成された一体的な組織の表現するものが＜普通＞の構成員の考えから大きく乖離する（時には，それと敵対する）場合もあることは，60年代末以降の学生運動や労働組合運動の動向から明白だと考えられた。他方，左翼政党や政治セクトのように，イデオロギーの一致で形成された結社的組織は，大衆の＜前衛＞を自認し，大衆を＜領導＞しようとする点で，最初から，＜現場＞を表現しようとする意図は持っていなかった。そうではなくて，＜普通＞の人びとと共にあり，そして，＜普通＞の人びとの考え方を積極的に表現し，リードし，それをみんなの共有のものとし，組織的な行動に移していくような存在＝＜活動家＞が必要だと考えられた。こんな風に考えていたとき，後に述べるヒュー・ベイノンの『フォードに働く』に接することができ，共感できる組織論があることを見出した。

同じ頃に，私は，もう一つ，「＜労働運動＞

17　この文書の執筆者名は，「労働運動研究会（少数派）」となっている。一部では，「神林論文」と呼ばれた。中味のほとんどは，神林章夫さんと私が分担して書いたもので，一部だけ，田中学さん（当時，東大）が加わっている。最終的な編集は私が行った。文章責任は，神林さんということにしている。当時，私の都立大学での位置は不安定で，共産党系の教員から激しい攻撃を受けていたから，＜新左翼＞系と見られがちな，この種の活動では，私の名前はなるべく表に出さないことにしていた。73，74年には，よくペンネームを使った。

18　労働問題研究者の中には，公労協の＜戦闘性＞，とくに，国鉄労働組合の＜戦闘性＞に期待し，エールを送り続けた人もかなり存在する。民間の労働運動が経営との協調路線に傾く中で，公労協は，＜マル生＞と呼ばれた生産性向上運動への抵抗闘争，さらに，スト権奪還闘争と，80年代初め頃までは，闘争の姿勢を維持し続けたからである。しかし，1970年代半ばの時点で，神林さんは，こうした公労協の＜戦闘性＞を冷ややかに評価していた。

領域の解体に向けて」(20) という文章を書いている。今，読んでも難解な左翼風の表現だが，「ヨーロッパ並みの賃金」を求めた総評型労働運動の行き着いた先とは何かを分析し，既成の組合運動を批判して登場した当時の＜新左翼＞の労働運動思想も，伝統的なフレームワークを脱し切れていないと論じている。「労働者の受ける抑圧の構造は，労働の場だけでなく，政治生活，社会生活，消費生活を通して複雑化，多面化，普遍化してきている」，それゆえに，従来の＜総評型＞労働運動が行き詰るのは当然だが，＜新左翼＞の発想も，抑圧構造の総体を見通す視点，あるいは広い意味での＜政治＞を貫くトータルな視点を持っていないのではないか，というのだ。これだけでは訳がわからないが，要するに，これまでは，労働現場，労使関係という次元でのみ＜労働者＞を把握してきたが，＜政治生活，社会生活，消費生活を通して＞トータルに把握すべきであり，狭い意味での＜労働運動＞だけ考えていては，運動は発展しないという主張である。こうした考え方は，高度経済成長を背景に，＜大衆消費社会＞の様相が深まり，＜労働者＞の姿も大きく変化していることへの，当時の私の反応であった。これもアジ・ビラの一種だったから，大学の中での危うい位置もあって，＜青木一夫＞というペン・ネームで書いている。この文章を載せたのは，藤田若雄先生と古手の労働ジャーナリスト（当時は，そうした人がちらほら存在した）の清水一さんが共同で編集されていた『労働問題研究』（亜紀書房）という雑誌である。この雑誌は，労働運動の新しい潮流が生まれることを期待して，藤田先生たちが70年に創刊し，74年の6号まで続いた。「既成革新からの離脱」「総評のゆくえ」「新左翼の労働組合論」「春闘方式の止揚を目指して」などの特集タイトルを見れば，その傾向がみてとれる。なお，当時は，労働運動をめぐって，こうした雑誌が数多く出版されている＜表現の時代＞であったことを書き留めておかなければならない。労働運動専門のポピュラーな雑誌として『月刊労働問題』（日本評論社）が広く読まれていたし，『季刊労働法』（総合労働研究所）もあった[19]。さらに，新左翼系の色彩が強い『新地平』（新地平社），『情況』（情況社），『現代の眼』（現代評論社），『現代の理論』（現代の理論社），『インパクト』（後に『インパクション』と改称：インパクト社）などの雑誌も，しょっちゅう労働運動の動向を取り上げていた[20]。さらに，さまざまな労働運動の活動家グループが，それぞれのニューズレターを発行しており，各種の集会でそれらが交換されていた。内容が面白く，人気のあるニューズレターも多かった。上に紹介した労働運動活動家の交流組織であった全労活も70年初めから80年代末まで毎月，「全労活ニュース」というニューズレターを発行し，主流的な労働運動が黙殺ないし排撃するような情報を提供し続けたし，『季刊労働運動』という雑誌も発行していた。また，争議や紛争が起きている現場では，おびただしい量のビラが書かれていた（70年代～80年代は，まだガリ版刷りの時代である）。とくに，争議中の現場労働者が個人で書くビラが多くあり，その表現は，組合組織が発行する従来型のビラにはない新鮮さがあった[21]。私たちは，労働運動をめぐる，こうした表現の豊富な氾濫にも眼をみはっていた。マスコミと大規模組織が伝える情報ではなく，個人や小グループが自ら発信し，情報を交流しあう＜ミニコミ＞の時代である。従来のように，労働組合という組織の名において発言するのではなく，労

19　この2つの雑誌には，とくに政治的な傾向性はなかった。この他に，やや学術誌的な性格を帯びた『日本労働協会雑誌』（日本労働協会）があった。

20　これらの雑誌は，1990年代になると，ほとんど姿を消してしまう。今では，労働運動や労働現場をめぐる情報は，社会的にほとんど流通していない。

21　以前だと，こうしたビラが労働争議の直接的な関係者を越えて撒かれ，読まれることは少なかった。従来の労働争議においては，関係する労働組合組織の範囲内で争議についての情報が流通していたといえよう。60年代末から70年代初めの争議は，＜正規＞の労働組合組織の範囲外で起きたものが多く，こうした場合，争議の当事者たちは，広く支援を求めて情報を発信した。

働者個人や小グループが表現する……。そうした現象には，新しい労働運動の時代の予感があった。しかし，そうした期待は長くは続かなかった。

## 7　労働争議のある一瞬を描きとめる
## —『労働組合の死と再生』について

1970年代前半の高揚した雰囲気の中で，私は，『労働組合の死と再生　—全金本山闘争の記録』(26) を編集し，出版した。自分では，この記録によって，70年代前半における労働者の姿のある歴史的一瞬を刻みとめえたのではないかと思っている。また，かねてから悩んでいた＜書く＞という表現の問題に一定の方向を見出せたのも，この仕事を通じてであった。本山製作所（仙台市）は中堅バルブ・メーカーで，その労働組合は総評傘下の全国金属に加盟していたが，1971年に，組織分裂攻撃を受ける。全金組合つぶしを目的に下級職制を中心に結成された第二組合は，やがて多数の組合員を獲得し，第一組合＝全金支部は組合員数200名余の少数派組合（第二組合は300名以上）となった。その後，ガードマンの導入に象徴される激しい労使抗争が展開され，72年末には，会社側はついに全金支部をロックアウトするに至った。その後，退職者も出て，74年には，組合員数は131名となっていた。しかし，踏みとどまった組合員たちの意気は盛んで，アルバイトで資金稼ぎをしながら，職場復帰闘争を展開していた。ロックアウトの後，東京地区を中心とする組合活動家たちは，何次かにわたって，仙台の本社工場と東京支店の門前で組合支援の示威行動を組織していた。私もそうした現地の支援行動に参加するなかで，多くの組合員と直接に話をすることができた。意外であり，感銘を受けたのは，本山の組合員にはまったく悲壮感はなく，明るく楽しみながら闘争していることだった。職制とのやり合いや，第二組合の幹部との抗争について語る一人一人の組合員の表現は実にゆたかで，多彩だった。

本山闘争の発端は，1968年の賃上げ要求ストライキである。高度成長の中で入社してきた青年労働者たちは，低賃金打破の闘争を展開し，ストライキを決行する。それは実に＜19年ぶりのスト＞であった。本山の組合は敗戦後の1946年に結成され，闘争は高揚するが，49年の合理化の嵐のなかで65％の従業員が解雇され，組合はほとんど形骸化する。青年労働者たちは，組合事務所の片隅でほこりをかぶっていた，かつての組合記録を読み直し，自らのストライキが＜19年ぶりのスト＞であったことを＜発見＞した。しかも，49年の大規模な人員整理を生き延びた２人のメッキ職場の年配の組合員がそれまでの長い沈黙を破り，青年たちに，かつての組合の＜記憶＞を伝えたのだった。68年のストライキの後，活動家解雇，組織分裂攻撃，ガードマン導入，そして，72年のロックアウトと，激しい労使の攻防のドラマが展開される。４年間の濃密な日々には，労働者として生きる多彩なドラマが凝縮されているようだった。私は，これらのドラマを描きとめるなら，ロックアウト後間もない，この瞬間をおいてしかないと思った。ロックアウト後は職場世界から遠ざけられ，工場外で組合組織と組合員の生活を支えていく営みが始まっていたから，日々の闘争の緊張の記憶は薄れていくだろうし，ロックアウト前で闘争のまっ只中であったなら，眼前の闘いが最大関心事であり，自分たちの体験を省察を交えて語る雰囲気にはなかったであろうからだ。後で振り返ってみれば，この記録を残せたのは，絶好の瞬間を捉ええたからだった[22]。

私自身としては，この仕事に踏み切ったのは，進行中の争議を描きとめるための方法論にあるメドがついていたからだった。これまでの労働争議の記録には，２つのタイプがある。あるいは２つのタイプしかない。１つは，労働争議の当事者自身が，争議が終わった後に回顧し，記録に残すものである。今１つは，＜研究者＞が自らの関心と視角から争議を＜分析＞するものである。これら２つのタイプにおいて，記録を作成する目的や意味は異なるが，大きく共通するところがある。共通するのは，争議がどのよ

うな事情で発生し，どのようなプロセスを経て，どのように終わり，どのような結果をもたらしたのか，その結果をどのように考えるべきか，についての評価と分析だという点である。違いは，当事者であるか否かによる感情移入の程度，分析の視点や争議を位置づける視野，争議の意味評価などにあるにすぎない。しかし，＜争議＞というのは，企業の生産活動と労働の＜日常のリズム＞を突然に停止させ，＜特異な時空＞を創り出すものではないだろうか。これまでの記録は，ドラマが終わり＜日常＞へと戻った時点から，つまり＜日常世界＞の視点から，ドラマについて評価分析を加えているといえよう。そうした記録の意味を否定するものではない。しかし，私の関心は，＜争議そのもの＞を描くこと，＜争議＞という＜特異な時空＞のなかに存在する労働者たちの生活と表情を捉えること，であった。これは，社会科学の既成の用語法で表現できるはずもなく，＜争議＞の只中にある当事者自身の表現による他はない。そして，私はすでに当事者である組合員たちが溢れんばかりの豊富な自己表現を内に秘めていることを確かめていた。それを表出させるには，糸口となる質問をするだけでよく，この点に心配はない。しかしながら，なおも，重要な方法論的問題に直面せざるをえない。それは，当然のことだが，当事者自身の表現を＜編集＞しなければ，＜記録＞とはならないということだ。＜編集＞とは，どのような行為なのであろうか。＜編集＞は当事者のナマの表現をずたずたに切り刻んで料理し，あらぬものに仕立て上げてしまうかもしれない。私は，この怖れだけは強く自覚していた。そして，先に触れたように，ケン・プラマーの生活史記録の方法論に遭遇して，この点こそは，社会学者たちが方法論上のジレンマとして長い間にわたって対峙してきたことを知った（後述，14の項参照）。しかし，この時点では，私は，できる限り，ナマの材料を傷つけまいと心がける程度の意識しか持ち合わせなかった。

にもかかわらず，この仕事に踏み切らせてくれたのは，前年の1973年に，ヒュー・ベイノンの『フォードに働く』が出され，工場現場における労働者の世界を記録する方法について，大きな共感と自信をあたえてくれたからだった（1980年に，私はこの本を翻訳して出版することになる。[34]）。ベイノンは，「社会の＜科学的＞分析者と称する者は人びとの生活に深い影響をあたえている問題を解明できなかった」と言い切り，「よく言って，彼らは右肩に研究者という＜職業＞を背負って書いたのであり，社会学者のための社会学を生み出したにすぎない。書く対象から書き手を切り離してしまう不条理である」と述べている（同書の序文より）。この文章を読んだとき，あまりにも同じ発想をしている人間がいて驚いたのだが，後に，ベイノンと会って話したとき，大学や研究世界をめぐって同じような遍歴をしており，改めて同時代の世界的な共有性のようなものを感じさせられたのだった。ベイノンのとった方法は参与観察であり，イギリス・リバプールのフォードの工場現場，パブや家庭，地域社会など労働者の生活現場でともに生活しながら，会話し，観察した記録を編集・分析したものである。彼は，自分のことをまったくの局外者ではなく，「内側に受け入れてもらった局外者」であると位置づけ，その記録を「遠慮がちな相互交流（'hesitant mutuality）の産物である」と規定している。そして，「これらの労働者や同じ立場にある他の労働者がこの物語のうちに自分自身の分

22　『労働組合の死と再生』というタイトルをつけたのは，かつて経営との闘争で敗北した組合が19年後に蘇ったというドラマに感銘を受けたからだった。「死と再生」は，当時，話題になっていたミルチャ・エリアーデの表現を借り受けたものである。編集者名は，「全金本山闘争の記録編集委員会」として，私以外に２人の名前を掲げているが，いずれも名目だけで，私の完全な単独の仕事である。この記録の出版を引き受けたのは，新左翼系のあるセクトと関係の深い出版社で，そのセクトと関係が深いと誤解されるのを避けたかったことと，この内容に対する思想的な攻撃を緩和するために，こうした表現をとった。

身を見出し，そして，おそらくは，そのことを通じて，彼らがどの方向に進もうとしているのかをより明確に見通せることを願いつつ，労働者に向けてこの本を書いた」（傍点，筆者）と述べている。それは，まさしく私自身が全金・本山の争議を記録したいと考えていた意図と同調するものだった。

対象から記録材料を取り出すという行為があり，さらに，それらを「編集」するという行為を行ううえで，「内側に受け入れてもらった局外者」と対象との「遠慮がちな相互交流」という位置づけには，ある種の＜危うさ＞＜不安定さ＞がはらまれている。だが，社会的な営みを記録するという行為は，たえず，この＜危うさ＞から免れえないのかもしれない。少なくとも，そのように開き直らなければ，記録の編集という行為を行うことはできない。全金本山争議の記録をつくるにあたって，私と組合員との間に，「遠慮がちな相互交流」という基礎は存在していたと思う。当時の大学における反乱，政治反乱，工場における反乱には通底するものがあり，本山の組合員も私のアヤしい素性を知っており，全くの＜局外者＞とは見ていなかったからだ。ペイノンにならって私がとった「遠慮がちな相互交流」という調査対象に対する調査者の位置づけに関連して，当時，私の念頭に強く存在したのは，上野英信『追われゆく坑夫たち』（1959年，岩波新書）の姿勢との対比であった。上野さんは，京大の学生をやめて，筑豊の中小炭坑の坑夫の世界に飛び込んでいったという。坑夫となり，炭鉱が滅びてしまった後も，生涯，筑豊で暮らすことになる上野さんには対象との＜相互交流＞が確実に存在したことはむろん，そこには＜遠慮がち＞という要素もなかったのではないか，と思う。あるいは，坑夫たちの中での＜インテリ＞としての＜遠慮＞は存在したのだろうか。いずれにせよ，ペイノンと私が取った位置は，あくまでも＜局外者＞（outsider）であり，アカデミックな世界とは訣別していたとしても，なおも＜調査者＞であり＜研究者＞であることに変わりはなく，そこに上野さんとの大きな違いがあった。＜遠慮がち＞は，なんとなく内側に入れてもらっている＜局外者＞の立場についての＜後ろめたさ＞＜居心地の悪さ＞から生まれるものであった。

1974年の夏，私と今は亡き編集担当者の平川弘志さん[23]は，仙台で一ヶ月余を組合員たちと過ごし，9回にわたる組合員の座談会を開いてもらって，その記録をとった。座談会は，若手組合員，年配の組合員，女性組合員，行動隊長格の中堅リーダー，本部リーダーなど，さまざまな組み合わせで行った。座談会方式によると，質問者と対象が相対する場合よりも，自由に話が展開するという特徴が存在する。お互いに記憶の訂正も行われ，過去のシーンが生々しく再現されることも多い。この際には，質問者は背後にいて＜空気＞のような存在になるのが望ましい。また，この他に，補足的に，個別のインタビューも数多く行うとともに，組合文書，団交記録，数多くのビラ，第二組合の文書，会社側文書などの文書記録を集めた。

記録の＜編集＞は予想したほど，困難なものではなく，材料そのものが編集の方向性を決めてくれるのではないかと感じたほど，自然に進んだ。＜編集＞を進める上での大きなテーマ，小さなテーマは，編集者が一方的に設定するのではなく，すでに，座談会の中で浮かび上がっているのだ。面白いテーマや大事なテーマについては，みんなが集中して時間をかけてしゃべってくれており，その重要性を表示してくれていた。そこで，こうした大・中・小のテーマに沿って，記録を区分し，それぞれにタイトル

23　平川さんという編集者がいなければ，この仕事はとうてい完成しなかっただろう。彼は，膨大な録音記録をものすごいスピードで原稿用紙におこしてくれた。ワープロのない時代だったのだ。この仕事の後，彼とは会う機会がなかったが，のちに風の便りで亡くなったと聞いた。手ではじく時代のパチンコの名手で，仙台で一緒に泊まって仕事をしていた頃，たばこ銭と酒代がなくなるとよく稼ぎに出た。パチンコ屋に入って，こぼれ玉を1つ拾うと，それを百発百中，命中させ，たちまち小遣い銭を稼ぎ出すのだ。私もお金がなかったから，ずいぶん助かった。

（大見出し・中見出し・小見出し）をつけてパーツ化し，ビラなどの文書材料も加えながら，それらを並べ替え，組み替えて構成していくという作業を行うことになる。叙述の大きな流れは争議の時間的な経過に沿うものとしたから，大きな構成も決まった。私自身の言葉は，補足的に，必要最小限にとどめることにした。この結果，ベイノンの作品よりははるかに記録編集者の分析的な言葉は少ないものとなっている。ここで行った作業は，「氏原工房」で修行した調査方法とは，根源的に異なるものをはらんでいたが，同時に，そこで学んだ調査の基礎がベースとして役に立ってもいた。その意味で，この仕事を終えることで，私は「氏原工房」を卒業し，氏原先生から自立させてもらえたかなという気分になった。

この記録は，1974年という時点において，争議のただ中にある労働者の中に凝縮されている数年間の体験を刻みとめようとしたものである。そこに70年代前半という時代のなかにおかれた労働者の姿が描きとめられているとすれば，この記録づくり作業にはいくらかでも意味があったといえよう。つい先日，突然，全金・本山支部のリーダーの１人，青柳充さんから，手紙をいただいた。80年代以後，仙台の全金・本山支部を訪れる機会はなかったが，職場復帰闘争を継続していることを知っていた。青柳さんの手紙は，2005年の今年，ロックアウトから実に33年ぶりに，組合と会社側の和解が成立したことを知らせてくれたものだった。全金本山にとっては，1970年代前半の＜時空＞がそのままに凍結され，その凍結された＜時空＞がその後の時間の経過にたえず対峙され続けてきたのではないかという気がする[24]。青柳さんは，定年年齢に達しているため，職場復帰はせず，今，組合としての闘争記録の編集にあたっておられるという。そして，30年余を経て『労働組合の死と再生』を改めて読み直し，共感を表明してくださっている。この記録は，少なくとも１人の確実な＜読者＞を得た。それも，その記録の対象者であった人物である。そのことは，私にとって，＜書く＞という営みに伴い続ける，こんな文章など誰が読むのか，という自嘲をめぐって，少なくとも，この作品については，ささやかな保障をえたと感じている。

## 8　イギリス生活とH．ベイノンの『フォードに働く』の翻訳

『労働組合の死と再生』を発刊した74年の終わり頃には，少数派組合や青年労働者たちのさまざまな＜反乱＞も次第に当初の勢いを失ってきていた。既成の労働組合から分裂が続き，地域を拠点とする合同労組が増え，新しい労働組合運動の流れが形成されるという展望は薄れていった。1973年10月の第一次オイル・ショックと＜狂乱物価＞と呼ばれた物価高騰のために，一時，労働組合の賃上げ攻勢は盛り上がり，労働運動全体は再び高揚するかに見えた[25]。だが，その後の事態の展開はまったく逆方向に向かい，70年代後半には経済の沈滞が続くなかで，労働運動の主流は，＜雇用確保＞をスローガンに，賃上げ要求の自主抑制，争議行為の自粛，企業の人員調整計画への積極的な協力を打ち出すなど，経営との協力体制を強めていく。このような中で，先に触れた労働組合の活動家の交流組織もまとまりを失い，いくつかの流れに分岐していく[26]。私自身も，その他のセクトに同調しない活動家と同じように，グループの分岐の中で居場所を見つけるのが難しくなり，うまく奨学金を見つけて，75年から外国に出ることにした。この後，私は，ドイツで３ケ月，イギリスで約２年を過ごした。

24　私が付き合ったもう１つの少数派組合―日本カーバイト労組（魚津市）も，経営や多数派労組の圧迫を耐え抜き，現在まで存続している。しかし，新しい組合員の加入はなく，オリジナルなメンバーが退職していくなかで，組合員数は次第に減少してきている。その他の少数派組合は消滅したものもかなりある。

25　とくに74年の春闘はストライキ件数が激増し，＜ゼネスト＞の様相を呈した。当時，＜天下大乱＞の時代に入ったと興奮していた活動家も多かったことを思い出す。